静岡発 こう読む

山形の映画祭から

▶▶▶加藤　裕治

今月5日から12日まで、山形国際ドキュメンタリー映画祭が開催された。アジア最大級のドキュメンタリー映画祭で、1989年から隔年で開かれていたが、コロナ禍の影響で今回は4年ぶりであった。

1日だけだが私も足を運べた。主会場は4カ所。徒歩で巡れる範囲にあり、山形の街はパスを下げた参加者でにぎわっていた。私が見た作品で印象に残ったのは、ポーランドとスロバキアに近いウクライナ・カルパチア山脈の麓にある小さな村を取材した「三人の女たち」だ。

山々に囲まれ、澄み切った空とともにある村には、穏やかな時間が流れている。しかし、男性の多くが出稼ぎに出てしまう貧しさも抱えている。ウクライナ出身のマキシム・メルニク監督は1年間この村に滞在し、3名の女性にフォーカスを当て、彼女らと村の生活をカメラに収めていく。

夫と息子に先立たれ、悪態ばかりをつく農業を営む女性とのやりとりは特に興味深い。なぜ私を撮影するのか、面白くないだろうと文句ばかりだが、1年間の生活の中で撮影クルーとの関係が変わっていく。よそ者だった監督は、単なる観察者ではなく時には息子のようにもなり、彼女がポツリとつぶやく心の声を聞く時も出てくる。皆で食べるご飯はどれもおいしそうだった。

上映後、地元の中学校から参加した生徒が、感想や質問を投げかけていた。意外だったのは、素朴なウクライナの暮らしに憧れるとの意見が多かったこと。登壇した編集担当が、山形もすてきですよと返答していた。若い人に山形はそう感じられないのか。それとも今の日本社会が慌ただしいのか。

映画はゼレンスキーが大統領になる前に撮影されており、コメディアンに政治ができるのかという村人の発言や、郵便局に切手が入荷しないといった行政の問題がちらりと映し出され、考えさせられる。

戦争のニュースは、その非日常が映し出されるが、日常の生活はわかりにくい。一方、こうした映画からは、そうした地域の暮らしの「匂い」が伝わってくる。

（静岡文化芸術大教授）

2023年10月29日
中日新聞（朝刊）p.7